

講義、講話、講演というものがある。似ている。だが、違いがある。はっきりとした違いを説明できなくても、何となく使い分けている。そういった言葉は多い。

この7月は、今までとは少しばかり様相が違った。ピークがやってきた。何のピークか。それは、人前で話す機会のピークである。講話と講演である。今月は4回もある。一月に数回ということは、今までもあった。だが、それが7月ということにはなかった。きっとたまたまだと思うのだが。

4回の持ち時間をそれぞれ見てみる。60分、80分、110分、120分となっている。長い。授業を参観しての指導助言であれば、20分から30分というパターンが多い。それで、いつも苦労している。長いのはこちらとしてはありがたい。

だが、聞くほうはどうなのだろう。それは、参加者のモチベーションにもよるだろう。話す時間が長ければ長いほど、こちらの責任が増すと考えている。責任重大である。何としても、わかってもらわなければならない。参加者の心に火をつけなければならない。

参加者とはいうと、幼稚園・認定こども園の先生、中学校の先生、小学校と中学校の先生、そして小学校の先生となっている。毎回、対象が違う。聞き手によって、話し方や進め方を変える必要がある。いや、変えなければならない。

自分にとっては、いい研修である。先生方に配付する資料は、5月から作り始めた。早すぎるといえばそうなのだが、熟成期間がほしかった。一度、作成を終える。しばらく放置しておく。そろそろいいかと、作成した資料を改めて見てみる。いろいろなことに気づかされる。加筆、修正を行う。このような作業を約1か月の間、ずっと行う。それでも満足いく資料はできない。それでも、努力しなければならない責務がある。自分がもっているものをすべて出し切らなければならない。そのときのベストを尽くさなければならない。

この7月は、今までとは違う点がある。それは、うまくやろうとしていないことである。ありのままの自然体で事に臨むといった境地だろうか。長い時間をいただいている以上、絶対にやってはいけないことがある。それは、時間延長である。延びてしまって、時間内に終わらないということは避けなければならない。そのための対策は講じてある。自己紹介を最後にもっていき、時間がなければやらない。実践例紹介に優先順位をつけておき、時間がなければ順位が低いものは省く。そもそも、資料が見出しやプロットだけではなく、文章になっている。読めばわかるようにしてある。これは、欠席者への対応でもある。

講話や講演は、助言や講義とは違う。その人の専門性に加えて人間性が試される。それまでの経験値も影響する。容易ならざるものである。だが、楽しみでもある。自分にどのくらいのことができるのか。参加者にどの程度伝わるのか。思う存分やってみようと思う。